

## 燃える男 も おとこ

うちのクラスには燃える男がいる。Tという名前前で、感情が高まってくると、だんだん身体から火が噴きだしてきて燃えるのだ。

「よし、やるぞ！」

たとえば、テスト範囲が発表された日。隣の席で、Tは意気ごみ燃えはじめる。

「今度は全教科で平均点越えだ！」

「ちよっと、熱いって！」

ぼくは席を立って距離をとる。

Tの身体はメラメラと輝いて、周囲は赤く照らされる。その様子は、まるで不死鳥だ。だからTには不死鳥の血が流れているのだというのが、E高生みんなの認識だった。

「ごめんごめん」

謝るTの身体からは、鎮火されるように火がしおしおと引いていく。

ぼくは落ち着き、汗を拭う。

そんなやり取りが、毎日のようにつづいているのだ。

Tはすぐに発火するので、それに合わせて教室の中のいろんなものが特注品になっている。

机や椅子、カーテンなんかは燃えにくい素材でできていて、仮にTの火が飛び移っても大事に至ることはない。万一に備えて、消火器も隣に置かれている。

クラスみんなは夏でも冬場みたいな恰好かっこうをしているけれど、これにもちゃんと理由がある。学生服は耐熱性たいねつせいになっていて、Tの火から身体を守ってくれるのだ。もちろん、夏場の長袖長ズボンながそでは応えるものがあるけれど、直火に晒さらされるよりはマシというわけ。砂漠さばくの強烈な日差しと闘う中東の人たちと似ているなあと、ぼくはひそかに思っている。

Tは、ときどき申し訳なさそうに言う。

「ごめんな、おれのせいだ。みんな熱いよな……」

ただ、次の瞬間にはカラッと晴れた顔をしてい

る。

「でもまあ、心頭滅却しんとうめつきゃくすれば何とやらだし、どん

まい！」

「おまえが言うなよ」

呆あきれながらも許してしまうのは、ひとえにTの  
人柄ひとがらにあるのだろうな、と思う。

Tは古いタイプで情に厚く、恩を受けると必ず返す。誰だれかが涙を流していると、一緒になつて泣いたりもする。だから、何かと周囲を騒さわがせてばかりいるけれど、誰も彼のことを突き放したりはしないのだ。それどころか、Tを心の支えにしている節もあるほどだった。

Tは常に前向きで、困難にくじけそうになつてもすぐ立ち直る。瞳ひとみをメラメラ燃え立たせ。何度でもよみがえる不死鳥のごとく。その姿が周囲に元気を与えるのだ。

ほくもTから元気をもらっている一人で、休み時間はもちろんのこと、土日になると彼の住りようむ寮へと遊びに行く。そして活力を得るのである。いまでは親友とも呼べる仲で、教室でも、Tの隣で

彼の火の番を任されるようにまでなった。

Tが一番燃えるのは、体育の時間だった。普段は自分の感情をある程度セーブしている彼も、体育のときだけは全開になる。

たとえば、サッカー。試合になると、Tは途端とたんに燃えはじめる。

炎に包まれた彼のほうには誰も近づくことができず、ボールを持てば独走状態。それでも果敢かかんに挑いどんでいく相手たちを、Tは持ち前の運動神経ですいすい抜いてゴールを決める。

「フエアじゃない！」

最初のほうはそういう声もあがったけれど、広い運動場で炎を纏まとってプレーする彼の姿は生徒たちを魅みりよう了して、批判はすぐになくなった。それに、たとえ火がなからうとTの実力は抜きんでていたのだから、みんなはTに羨望せんぼうの眼差しを注まなざぐようになり、いかに彼を自チームに引き入れるかで競いあった。

Tは野球も大の得意で、いつも四番でピッチャーを務めた。

Tの投げる球は、凄まじかった。火を噴くような豪速球。いや、Tの場合はキャッチャーミットを本当に焦がす、真正銘の火の球ストレートなのだ。打てるやつなど皆無だった。

にもかかわらず、打席に立ちたがるやつは後を絶たなかった。あの球を打ちたい。初めてTを打ち負かすのは、ほかでもない自分なんだ。そんな男のロマンを駆り立てるものが、Tの球にはあったのだ。

Tはバッターとしても素晴らしく、鋭い当たりを飛ばしては気持ちの良い金属音を響かせた。ただ、Tが使ったあとの金属バットは熱くて持てなかつたので、次のバッターはホースで水をかけ、じゅわつと冷ますのが常だった。

バレーでもテニスでもバスケットでも、Tは同じように活躍し、その活躍に男たちは胸躍らせた。

そんなやつが各部から放っておかれるはずがない。

日々、いろんな先輩が教室にまで押しかけてきてはTを誘った。

けれど、彼は断固として拒みつづけた。本人曰く、本気になるケガ人が出る。ほくは、体育ではまだ余力を残していたのかと驚くとともに、たしかにあれ以上燃えると危なそうだなあと想像した。もちろん相手チームの選手のことにも心配だけど、耐熱仕様でない他校が試合会場になった場合、どうなるか。それを考えると、体質ゆえに人との交流が制限されるTの孤独を勝手に感じ、なんだか切ない気持ちになった。

そんなTの様子がおかしくなったのは、ある日のことだった。

その日、隣のクラスに転校生がやってきた。

噂は瞬く間に広がった。

Sさんというその女子は、ぞっとするほどの美貌の持ち主らしかった。

「どれだけの美女か、拝みに行こうぜ」

言いだしたのは、Tだった。ほくはあまり興味が湧かなかったけど、周りの男子たちにも誘われて、休み時間に一緒に隣のクラスを覗きに行った。

そのときに、どうもTはノックアウトされたら

しい。Sさんを一目で好きになったのだ。

それが判明したのは一週間ほどがたってからのことだった。

ぼくは、相談があると放課後Tに呼びだされた。何の話かと思っていると、Tは口を結び、真っ赤な顔でメラメラと燃えていた。いつも以上に燃えているなあと思いつながら、なんだか炎の感じが少しがうことに気がついた。

ぼくは、すぐにピンときた。これは恋の炎だな、と。

「おれはSさんに告白する！」

思っていたそばから、Tはいきなり宣言した。そしてこちらに身を乗りだした。

「Sさんこそが運命の人だ！」

ぼくはすかさず距離をとる。

「ちよっと落ち着けて。こっちは熱いんだからさあ……」

持っていた小型の消火スプレーをTにかけたが、火は弱まってくれなかった。

「落ち着けるわけがない、これは本気の恋なん

だ！」

やれやれと、ぼくは呆れた。

「本気って、これで何回目だよ……」

Tは恋にも燃えやすい体質で、つまるところが惚れっぼいやつだった。だから、これまで何度も、ぼくは同じような相談をされてきていた。そしてそのたびに、大変な思いをしてきたのだった。

スポーツは向かうところ敵なしのTなのに、恋だけはうまくいかなかった。男からは憧れられても女子たちからすると熱すぎるらしく、付き合う対象にはならないのだという。

それでも果敢に告白を繰り返すTは、その分だけ振られつづけてきたわけだ。

「いや、今度こそ大丈夫だから」

Tは胸を張って主張する。

「その自信がうらやましいよ」

だけど、と、ぼく。

「今回ばかりは、やめといたほうがいいんじゃないかなあ……」

「ネガティブな発言は控えてくれ。もう決めたこ



となんだから」

Tはまったく聞く耳を持たない。これじゃあ相談ではなく、ただの決意表明だ。

「Sさんとなら、絶対うまくいくと思うんだ」

Tは分かったような口で言う。

でも、そのSさんが問題なんだよなあと、ぼくは心の中で呟いた。

Sさんは、涼しい顔で何でもこなす秀才だった。凜とした美貌にふさわしく、性格も極めてクールらしい。細い目の中で佇む瞳は氷のように冷めていて、世俗には興味がないと語っている。

そして一番肝心なのが、Sさんも、Tに劣らず相当変わった人だということだった。

転校初日でついた呼び名が、冷めた女。

燃えるTとは対照的に、Sさんの周りには何かにつけて、すぐに冷えて寒くなってしまうのだ。

「それが何か？」

Sさんは、いつも冷ややかに言い放つ。そしてその瞬間、周りの温度がぐっと下がり、凍えるような寒さになる。だから隣のクラスは、ダウンを

着て授業を受けることを余儀なくされた。彼女の祖先は雪女にちがいないと噂が立ったが、それもうなず頷ける話だった。

Sさんの通ったあとには氷が張るといふことも、すぐにみんなに知れ渡った。うっかり後ろを歩くと滑るので、移動教室のときは注意しなければならなかった。

そんな冷めたSさんに、燃えるTは恋をしたのだ。

「おれは、Sさんと結ばれるために生まれてきたんだ」

Tは勢いこんで言う。

「こんな相性が合う人は、ほかにいない！」

「個人的には逆だと思うけどなあ……」

熱いものと冷たいもの。普通は相殺するだけじゃないかと、ぼくは思った。まさしく、けんえん犬猿の仲ここにありだ。

「そうじゃないんだ」

力説はつづく。

「要は、中和なんだよ」

「中和？」

「酸性とアルカリ性のものを混ぜると、ちょうどいい塩梅あんばいになるじゃないか。おれたちも、あれと同じになるにちがいない」

Tは自信を持って言い放つ。

「二人合わせて、pH7だ！」

だけど、と、ぼく。

「プラスとマイナスでゼロってこともあるじゃないか」

接触した瞬間に、二人は消滅するんじゃないか。そんな不安も頭をよぎる。

が、Tはあくまでポジティブだった。

「そのときは、そのときだ。ゼロはすべてのはじめりとも言うしな！」

「まあ、そりゃそうだけど……」

ぼくは説得するのを諦めたあきら。どうせ聞き入れてもらえやしないのだから、言うだけ無駄。事態を静観するしかない。また面倒なことにならないければいいけれど、と溜息ためいきをついた。

その日から、Tの猛アタックが**はじ**まった。放

課後になるとSさんを廊下<sup>ろうか</sup>で待ち伏せて、話しかけようと近づいていく。

けれど、SさんはTをまったく寄せつけなかった。

「あんたね？ 燃える男つてのは。こっちにこないで。溶けるから」

冷たい口調で、Sさんは言う。

「あの、少しだけ話したいんだけど……」

「悪いけど、ヒマじゃないの」

「あの……」

「じゃあね」

取りつく島もない有様だ。

TもTで、自分で宣言したわりには、いざSさんを前にするといつもの勢いが鈍<sup>にぶ</sup>るのだった。

「あの、Sさん……」

「またあんたなの？ 勘弁<sup>かんべん</sup>してよ」

「えっと、その……」

しどろもどろになっているうちに、Sさんはすたすたと去ってしまふ。

Tは燃える男であると同時に、じつは稀<sup>まれ</sup>に見る

シャイボーイなのだった。

ぼくと二人になったときだけ、また威勢のいいことを口にする。

「神はおれに、試練を与えたもうた」

「はじまったよ……」

呆れるぼくには構わずに、Tはつづける。

「いま、おれは試されてるんだ。この気持ちか本物かどうかを」

「どうだか」

「止めるなよ？ おれは本気なんだから！」

Tは勝手に燃えあがり、あたりは熱気に包まれる。Tは太陽の表面みたいに火を噴いて、ぼくはそれに当たらないよう場所を変える。

「さあ、今日こそ気持ちを伝えるぞ！」

Tは力強い足取りで出ていった。けれど、Sさんに近づくにつれて次第に勢いは弱まって、声を掛けるころには小さく縮こまっている。

「Sさん……」

緊張が極度に達し、聞こえるか聞こえないかの声で呟く。

熱気で気配を察したか、Sさんは振り向く。

「ほんと、しつこい」

軽蔑けいべつの眼差しに射抜かれて、Tは凍ったように動けなくなる。

熱気と冷気がぶつかって、廊下に強い風が吹く。しばらくしてSさんは、ふん、と見下すように言い、Tを置いて去っていった。

なす術すべなく立ち尽くすTに、ぼくは近寄る。

「なんで気持ちが悪くならないんだ……」

さすがのTも少しへこんで、弱気にこぼす。

が、次の瞬間にはもう立ち直っているのだから、すごいメンタルだなあと思う。

「いやいや、そうじゃない」

Tは、自分に言い聞かせる。

「伝え方が悪いだけだ。もっと頭を使わないと！」  
立ち直るばかりか、よりいっそう燃えはじめる  
始末だった。

そんなことが何度もつづき、日に日にTの火力は増していった。ぼくは、これまでのことを思いだして嫌いやな予感を覚えつつも、適当あいづちに相槌を打つ

てやり過ぎした。彼女は諦めたほうがいい。いくらそう助言しても、Tの耳には届かない。ならば熱が収まるか突き抜けるかを、ぼくはひたすら待つしかないのだ。

そして、事態は悪いほうへと進んでしまった。

数週間が過ぎた、その日。Tは、いつにも増して燃えていた。

「もうちょっと離れてくれって」

そのころになると、Tは四六時中、大きな火を噴いていた。クーラーもまったく歯が立たず、教室は日がな一日、サウナ状態。耐熱服を着ていても一緒にいると火傷やけどしそうなほど熱く、距離をとって歩かなければならなかった。

「おいってば！」

Tは俯うつむき加減で、ぶつぶつ呟く。

今日こそは。なんととしても。おれならできる。

絶対。

ぼくのことは無視をして、燃える拳こぶしを握りしめ、Tは決意を固めている。

「あっ！」

そのときTは、廊下の奥にSさんの姿を見出した。  
た。

「よし！ 見てろよ！」

誰に言うともなく言って、つかつかとそちらに近づいていく。

Tの身体はどんどん燃える。炎は天井まで届き、焦げ目がつく。

ああ、もう手遅れだ。

ぼくは直観的に、そう思った。

こうなったら、いつもと同じことになる。

そう覚悟した刹那せつなだった。

ごうっと大きな音が響き、廊下は真っ赤に染めあげられた。と同時にTは真っ赤な渦うずに包まれて、一本の火柱と化してしまった。

居合わせた人たちは、うわあ、と大声をあげている。

その声を聞いて、Sさんも振り返る。が、つまらなそうな顔をして、すぐにさっさと歩き去る。

残されたTは、ごうごう燃えた。炎は留とどまるところを知らないで、あたりを灼熱しゃくねつの世界に変えて



しまう。

誰も近寄れないでいると、火柱の中のTの黒いシルエットはぼろぼろと崩れ落ちはじめた。ぼくはそれを黙って見つめるしかない。

Tの姿が崩れ去ってからもなお、しばらくのあいだ火は燻りつづけていた。

やがて自然に鎮火すると、ぼくは焼け跡に呆れながら近づいた。

「またやった……」

Tは恋をするたび、結局いつもこうなってしまふのだ。同じ光景を何度も見せられてきたぼくは、もうすっかり慣れっこだった。

焼け跡には、灰がたくさん積もっている。その中心では、赤ちゃんが泣き声をあげている。

「ほーれ、よしよし、大丈夫でちゅよお」

ぼくは優しく抱きあげて、宥めてあげる。

Tは熱が行き過ぎると、こうして激しく燃えあがる。そして炎の中で燃え尽きて、また生まれたときの姿に戻るのだ。不死鳥の血が流れているという話は、きつと真実なのだろう。

「さて、と……」

明日からの苦勞を考えて、ほくはすっかり途方とほうに暮れる。

まったく、ほんとに世話が焼けるやつだ。

元の姿に戻るまで、またクラスのみんなで協力しあってTを育ててあげないと。

(了)